
恋姫×スクライド

午後の緑茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫×スクライド

【Zコード】

Z5471W

【作者名】

午後の緑茶

【あらすじ】

恋姫とスクライドのクロスです。カズマのカツ「良さをうまく書ければいいなあ」と思っています。ちなみにカズマはかなみに出会っていない設定です

プロローグ

? 「ほらあ～、一人とも早く早く～！」

どこか暖かく緩い雰囲気の桃色の髪をした少女が後ろにいる黒く美しい髪をした少女と、赤い髪の小さな少女を急かす

？？— お待ち下さい、桃香様。お一人で先行されるのは危険です」

？？？「 そうなのだ。」 こんなお田様一杯のお皿に、流星が二つも落ちてくるなんて、どう考へてもおかしいのだ

二人はどうんどうん先に行く桃香という少女に危険だと注意する

慎重に近付くべきです」

? 「 そ う か な あ ～ ？ ． ． ． 関 雲 長 と 張 翼 德 つ て い う 、 す つ “ こ い 女 の 子 た ち が そ う い う な ら 、 そ う な の か も だ け ど ． ． ． 」

「お姉ちゃん、鈴々たちを信じるのだ」

関羽「そうです。劉玄徳ともあろうお方が、真っ昼間から妖の類に襲われたとあつては、名折れというだけではすみません」

劉備「うーん・・・じやあさ、みんなで一緒に行けば怖くないでしょ?だから早くいこ」

そう言って劉備はまた先に行つてしまつた

張飛「はあ～～～～～、分かつてないのだあ～～～」

関羽「全く。・・・鈴々。急ぐぞ」

張飛「了解なのだ」

三人は流星が落ちた方角に向かつた

？？「・・・ん？」

家の中のはずなのに乾いた風を肌に感じて眼が覚める
いつもと違う寝床の感触に違和感を感じ、周りを見渡すと一面の荒
野が広がっていた

？？「なんだ？外で寝ちまつたのか俺・・・」

赤みがかつた茶色い髪を手で搔きながら身の回りを確認する
しかし周りに知っている場所がなく、寝ぼけたにしては規格外すぎる
すぐに自分の家の付近ではないことを理解した彼は服に付いた砂を
払いながら立ち上がり、

？？「なんもねえし、なんも持つてねえ・・・。」れじやあ誰とも連絡とれ「なんじや」つやあああああああーー。」・・・なんだあ？」

へんな叫びを聞きつけて向かつてみると田舎の高い拳動不審の男がいた

白川野「エリーリーだ! なんかのエリ もつか! ？」

あまり関わりたくないなかつたが人が彼しかいなかつたため接触してみる

白い人「は!? まさか誘拐? でも俺「おい! お前!」
・・・へ?」

驚いた顔でこっちを見ている白い男に希望は薄いか聞く

？？「あんたここがどこだか分かるか？」

白い男 - · · · わかりません」

やつぱりなとため息を吐いていると、おそらく同じ境遇の人だと感じた白い男が尋ねる

白い男「あの・・・、君も気が付いたらここにいたの？」

？？「ああ」

お互いの状況を確認し、とりあえず一人ではないことに少しほつと
する白い男

白い男「俺は北郷一刀。聖フランチエス力学園の学生だ。君は?」

？？「・・・カズマだ」

これが後の天の御遣いと、天の拳の出会いであつた

1話 「闇雲長」

お互^い同じ境遇だと分かつた二人はまずこの辺りに詳しい人を探そうということになり、

荒野を歩いていたのだが・・・

カズマ「だから、ついてくんじゃねえよー！」

一刀「待てよー！一人より絶対二人で行動した方がいいってば。つていうか一人にしないでー！」

実際はカズマが人を探すには手分けした方がいいと言つたが一人が不安な一刀は一緒に探そうと提案する。しかしどんどん一人で行つてしまふカズマに一刀がついていつてる状態だった

一刀「携帯も圈外だし、本当にどここの田舎だよ」

一刀は持つていた携帯電話を見るがアンテナ表示は無情にも一本だつた

カズマ「お前向う探せよー！」

一刀「いや。こういう時はあまり離れない方が・・・ん？」

その途中前方に目をやると服を黄色で統一した3人組が歩いてきた

カズマ「人だ。つておいー！」

一刀「人だ！やつぱり一緒に行動しててよかつたな」

人を見つけたことに喜び、黄色い人達に近づいて行く一刀
しかし一刀は近づいてやつと気付いた

一刀「コスプレ？」

とりあえず東洋系の顔つきだが、格好は鎧というか何というか、外
に着ていく格好ではない

アニキ「……はあ？ 何言つてんだ、こいつ

チビ「さあ？ あっしに聞かれても……」

アニキ「おメエ、分かるか？」

デブ「……わがんね」

リーダーの様なノッポの奴と、子分の様なチビとデブが一刀を変な
眼で見る

一刀「あの、すいません……」

アニキ「何だよ」

一刀「……、どうですか？」

格好が変でもとりあえず現在地を聞いてみる

3人「……はあ？」

3人は呆れたようにこちらに変な眼で見る

一刀「僕達道に迷つてしまつて困つてゐるんです。もしよかつたら、連絡か携帯充電させてもらえませんか?バッテリー切れちゃつて…」

さすがに変な格好の人でも携帯くらい持つてゐるだろつと思つていたが

チビ「アニキ。こいつ頭おかしいつよ

アニキ「俺も思つた」

デブ「んだ」

なんだか反応がおかしい、言葉のキヤツチボールが出来てない

一刀「あの、言葉通じてますよね?」

アニキ「それはこつちが聞きてえぜ。俺の言つてること分かるか?」

一刀「はい、分かりますけど…」

一刀は自分がちゃんと喋れていなかつたのかと考えていたら冷たいものが頬に触れた

アニキ「なら、よかつた…。ついでに金出してもらおつか?」

頬に触れたそれはコスプレ用のおもちゃではなく包丁より鋭利な刃物

一刀「はい？」

アーチキ「言葉通じてるんだよな？なら、早く金出せよ。ついでにその光る服もな」

カズマ「てめえら強盗か・・・」

チビ「へつ、今頃気づいたのかよ」

デブ「だな」

今まで事の成り行きを興味なさげに見ていたカズマが強盗と気付き近寄つて来る

慌てて3人から離れてカズマの横に移動する一刀

一刀「や、やばいぞカズマ！あれ本物だ！！」

一刀は初めて向けられる凶器に焦る

カズマ「お前、闘えないならさがつてろよ」

一刀「おい、カズマ！！」

一刀は危険だとつがカズマは3人の前に立つ

アーチキ「何だ。お前、これが怖くないのか？」

そう言つて持つている刃物をカズマに向けて威嚇する

カズマ「はっ！んなもんで、じじるわきやねえだろ？が。」

カズマは右手を開いた状態で前に出して鋭い眼光で3人を睨む
カズマ「こいつら、ぶつ飛ばして人のいる所まで案内させればいいだ
ろ？が！…」

カズマは開いた手を人差し指、中指、薬指、小指を順番に折り。最
後に親指を折つて出来た拳を軋むほど握りしめる

カズマ「さあ、案内してもらひつぜ。人がい「までえええええい！
！…！…・・・ああん？」

殴りかかるうとした瞬間、遮るように勇ましい女の声が響いた

？？「丸腰の一般人に刃を向けるとわ…！貴様らに武人の心はない
のか…！…」

アニキ「なんだ、てめえは…！」

突然現れた女に驚きながらも刃を向ける

？？「賊」ときに武人の心を聞いても無駄か…。なら仕方ない、
弱氣者を苦しめる獸よ。

この関雲長が成敗してくれる…！…」

何もない荒野の透き通るような空の下で

青龍円月刀を構える関雲長と名乗る少女と

彼女の登場に動搖する3人組と一刀

そして、握った拳を向ける相手を盗られて不満そうなカズマがそこにいた・・・

2話『出会』（前書き）

カズマの性格ちょっと変えます。でないと一人でどうか行っちゃい
そつなんで・・・

2話『出金』

黄色い3人組は関雲長と名乗る少女によつて軽く倒され、尻尾を巻いて逃げていつた

関羽「まつたく・・・。怪我は無いか?」

一刀「えつと、うん。大丈夫だよ、助けてくれてありがとう」

カズマ「けツ」

危険が去つたことに安堵する一刀と、獲物を盗られたことに不満なカズマ
しかし一刀はまた戸惑つていた

一刀「（また、コスプレだ・・・）」

少女は緑を基調にした服を着ており、これもさつきの3人組同様ファンタジックなアーティストのアッシュション誌では見かけないものだつた

関羽「いや、怪我がなくてなによりだ。しかし、こんな場所で武器も持たずに不用心だぞ」

服装はコスプレだが関羽の闘う姿や武器を見てとりあえずこれは日本ではないのでは?

そう考えた一刀は少女に尋ねる

一刀「いきなりで申し訳ないんだけど、ijiビコだか教えてもらつていいかな?」

関羽「なにも知らないで歩いていたのか？・・・」
〔は幽州啄郡。
五台山の麓だ」

一刀「？」

カズマ「？」

場所を聞いた2人は聞きなれない地名に首をかしげる
とりあえず自分達の知らない土地ということはわかつた

？？「待つてよ～、愛紗ちゃん」

えらく緩い雰囲気の声が聞こえ、目を向けると桃色の少女と赤髪の
少女がこちらに走ってきた

？？「もう、いきなり走つて行つちやうんだもん」

？？「愛紗はよくお姉ちゃんをおいていくのだ」

関羽「あ、えつと、すみません桃香様。この2人が賊に襲われてい
ましたので・・・」

3人は知り合いのようで、どうやら関雲長が2人を置き去りにして
しまつたらしい

しかし一刀はそんな会話をよそに今の状況について考えていた

一刀「（ゆうしゅうたぐん？そんな所学校の近くにない。それに
あの子自分のこと関雲長って言つてたな・・・）」

聞いたことのない地名、聞いたことのある名前に一刀は軽く混乱してきました

カズマ「それよりお前らだれだ？」

些か失礼だがここでカズマが3人に訪ねた

一刀「あつ、自己紹介がまだだね。俺は北郷一刀、こっちがカズマだ。さっきは助けてくれてありがとう」

関羽？「姓が北、名が郷、字が一刀か？」

一刀「字？いや、姓が北郷で名前が一刀だ。字は無いよ」

聞き慣れない字という単語が出てきたが自分にはない

関羽「字が無い？珍しいな。私は姓が関、名が羽、字が雲長だ」

はい？

劉備「私は姓が劉、名が備で字が玄徳だよ」

はい？

張飛「鈴々は張飛なのだ」

一刀「はいはいはいはいはいはい！」

4人「わあああ？」

あまりのビックネームに思わず叫ぶ一刀

カズマ「脅かすんじゃねえよーーー！」

一刀「うう、ごめん・・・」

3人の名前がある有知な三国志出てくるものであるから仕方ないかもするが・・・

一刀「（周りの風景やら関羽さんの暴れっぷつやゆうしおうたぐりなんかで怪しい所だとは思っていたけど・・・）」

4人が変な目で一刀を見る

一刀「あのう、質問していいかな？」

一刀一やつぱり・・・・

一刀は3人に今の世の中について確認した

一刀「（信じがたいが）こは三国志の時代だ。しかも年数的に黄巾の乱より前。いや、もうその時期か？」

カスマー おい。自分で解ってないで俺にも教える」

一
刀
說
明
中
•
•
•

カズマ「なるほど、タイムスリッパか・・・。なにいいいいいいいいいいいい」

一刀「タイムスリップな」

カズマに説明しているときに気づいたがどうやらカズマは三国志を知らないらしい

カズマ「おー。ビックリだよー。」

一刀「俺にだつてわかんないよ・・・」

ちょっと歩けば自分の知っている場所につくだろうと思つていたカズマは混乱した

一刀「とりあえずこここの事を何も知らない俺たちが変に動いたらややこしくなるだろ? だからあの子達について行かないか?」

カズマ「ぐぬぬ・・・」

自分の知つている場所がどこにもない事に気づいたカズマは一刀の案に乗ることにした

劉備「あのね、次は私が質問していい?」

一刀「え! ? あ、うん。どうぞ」

劉備「お兄さん達はどうしてこんなところにいたの?」

カズマ「気がついたらここにだつた」

一刀「同じく」

劉備「うーーーん。じゃあどこの出身?」

一刀「東京の浅草」

カズマ「ロストグラウンド」

2人「うん?」

ここで初めて2人はお互いの出身に違和感を持つ

一刀「外国?」

カズマ「浅草つてどこだよ?」

一刀はもじやと思いカズマに尋ねる

一刀「カズマの住んでた所つて日本?」

カズマ「ん? そういえば昔そう呼ばれてたっぽいが今は違つて」

一刀「(昔? じゃあ俺と同じ時代の人じゃない?)」

カズマ「どうしたんだよ?」

一刀「多分カズマは俺の時代より未来の人間だと思つよ」

カズマ「なんでだよ?」

一刀「いや、俺が住んでた日本にロストグラウンドなんて所は無かつたし、カズマ昔は日本つて呼ばれてたって言ってたろ?」

俺はカズマとの会話に出た矛盾をのべた

カズマ「ふうん・・・」

一刀「あれ、あんまり驚かないな」

カズマ「まあ、タイムなんとかしたらもつ驚くもんねえだろ」「もつと驚くと思つていたけど意外だ・・・

劉備が田をキラキラさせながら身を乗り出してきた
「私もないな、ビックリの州だ？」
確かに

張飛「んにゅー、ビックリも聞いたことないのだ」

関羽「私もないな、ビックリの州だ？」

劉備「ねえねえお兄さん達。もしかしてこの国のことはなんにも知らないの？」

劉備が何かを期待した瞳で見てきた

カズマ「知らん」

一刀「知らない・・・。いや、知識としては知つてはいるけどその知識が俺の居る時代の遙か昔なんだ」

劉備「・・・？」

一刀「つまり俺達は今よりずっと先の未来から来たってこと

もつ頭がパンクしそうで俯いていると・・・

劉備「やつぱり思つた通りだよ、愛紗ちゃん・鈴々ちゃん・」

劉備が田をキラキラさせながら身を乗り出してきた

劉備「この国のこと全然知らないし、たまに変な言葉使つし、それになんと言つても服が変！」

カズマ「なんだと！」

一刀「この時代だと変なんだよカズマ・・・」

言われるとちよつとへこむ・・・

劉備「この人達がきっと天の御使いさんと天の拳を持つ人だよ！」

関羽「管路の予言ですか・・・。あれはエセ占い師の戯言では？」

張飛「鈴々もそう思うのだ」

劉備「でも、東方より飛来する流星は、乱世を治める使者の乗り物だーって言つてたよ？」

関羽「確かに占い通りだこのお方達が御使い様といつことになりますが・・・」

鈴々「でもお兄ちゃん達なんか頼りなさそうなのだ」

関羽「英雄の霸氣は感じられませんな」

劉備「そんなことないと思つけどなあ

3人にジロジロ見られて一刀達は居心地が悪そうだ

一刀「で、その天の御使いつてなんだ？」

一刀は今まで疑問に思つてゐたことを口にした

关羽「この乱世に平和を誘う使者。・・・自称大陸一の占い師の言葉です」

カズマ「乱世?」

張飛「今の世の中のことなのだ。漢王朝が腐敗して弱い人達から沢山税金をとつて、好き勝手してるのだ! それに盗賊もいっぱいいっぱいいて弱い人を苛めているのだ!」

劉備「そんな力の無い人達を守ろうつて立ち上がつたのが、私達3人なんだけど・・・。3人だけじゃなんにもできなくて・・・」

关羽「どうすればよいか方策を考えていたところでさつきの予言を聞いて・・・」

張飛「鈴々達はここに来たのだ」

一刀「それで御使いが居るであろう場所に俺達がいたと・・・」

丸つきリアニメや小説何かによくある設定である

一刀「だけど俺達はそんなすごい人じゃないよ?」

劉備「それでもあなた達がこの国の人じゃないっていうのは事実だよ!」

一刀「うーーーん・・・」

自分達が天の御使いじゃないかといふ問題に悩んでいと……

ぐう～～～～～～～～～～～～。

と、盛大に腹の虫が聞こえた

カズマから……

カズマ「もう無理……」

一刀「カズマ？」

カズマ「限界だ！腹減った……」

そういうて頃垂れるカズマ

一刀「そりいえば俺も腹減ったな……」

張飛「鈴々もお腹減ったのだー！」

劉備「私達も朝ご飯食べてなかつたね」

关羽「近くの街に移動しますか」

カズマ＆張飛「賛成・なのだー」

こうして5人は街に移動した

3話『誓い』（前書き）

カズマの性格がつまくつかめてない気がします・・・

カズマ sides

しかしながらめんどくせえことになつてきたな・・・
成り行きでこいつらについてきたけど早く元いた時代に帰りたいぜ
俺達は飯を食うため近くの街に来たが、本当にタイムなんとかしち
まつたんだな。

街並みや歩いてる奴の服装が俺の知らねえもんばかりだ

張飛「お兄ちゃん達何やつてるのだ？鈴々は腹ペコなんだから早く
くるのだ！」

俺と・・・なんつたつけ？もう一人の白い奴が街並みに気を取られ
てたらさつき会つた3人組のチビ助が遅いと文句言つてきやがつた

張飛「お店はこっちなのだ！」

一刀「わつと！！！」

カズマ「お、おい！引つ張んな！！」

待ちきれないチビ助は俺達の腕を掴んで店に引きずつて行つた
そのまま俺達は店に入つて食いもんの匂いを嗅いだ瞬間俺とチビ助
の涎は止まらなかつた

めんどくせえ事は今は無しだ！まずは飯だ飯！！

なんて出された料理を平らげ、満腹吐息をついていた俺達に

劉備 それでね、北郷様。カズマ様。

劉備が姿勢を正して語しかけてきた

劉備「さつきも言った通り、私達は弱い人が傷ついて倒れていくのが我慢できなくて、少しでも力になればと思って旅を続けていたの」

真剣な雰囲気になり、俺もガズマも話を聞く

劉備「でも・・・3人だけじゃもう、何もできない・・・そんな時代になつてきてる」

関羽「官匪の横行、太守の暴政・・・弱い人間が苦しみ、力を持つた者がそれを虐げる。今はそんな大陸になつてゐる」

張飛「3人じゃ、もうなんにも出来ないのだ・・・」

劉備「でも、そんなことで挫けたくない。私達でもなにかできるはず。・・・だから御使い様！！」

一刀「は、はい！？」

劉備「私達に力を貸して下さいーー！」

劉備はぎいっと身を乗り出して頬み込んだ

劉備「天の御使いであるあなた達が力を貸してくれば、もっともつともっと弱い人達を守れるって、そう思うんです」

劉備は真っ直ぐな瞳を興奮で少し潤ませながら、俺達の手を強く握り締める

そこから伝わるのはただ弱い人を守りたい・・・そんな優しくて暖かい気持ちが俺の手にも伝わって来た気がする

一刀「だけど俺は天の御使いなんてすごい人じゃないよ？どこにでもいる学生だ・・・そんな俺が人を助けるなんて出来るのかな？」

人を助けるのは口で言つほど簡単なものじゃないと思う

关羽「あなたの言つことは正しいですが、正直あなた達が御使いでなくても良いのです

カズマ「どいことだ？」

一刀「御使いでなくともいい？・・・なるほど、御使いかもしけないって風評か」

張飛「そうなのだ。鈴々たちは強いけど名声とか実績がないのだ」

関羽「私達は山賊退治などしていますがそれは一部の地域でしか評判がありません。」

劉備「誰かを救つても、違う場所で誰かが泣いている・・・もう私達だけじゃ限界が来てるんです」

確かに御使いという神輿があれば劉備達には大きな力になるだろう天の御使いが傍にいれば劉備達の行動に世間は注目するようになる多分俺がここに来た理由はこれなのかもな・・・彼女達に力を貸すために。

一刀「爺ちゃんが、『世に生を得るは事を成すにあり』って言つてたつけ・・・」

なら今日の前にいる劉備達こそ、その切つ掛けなのかもな
俺は深呼吸をして――――――

一刀「・・・分かった。俺でよければその神輿役、引き受けるよ」

劉備「本当ですか！――――――

カズマ「お前本気か？」

一刀「カズマはどうする？今のところ帰る手段もないしもしかしたら世の中平和になつたら帰れるかもしねりないよ」

カズマ「・・・」

劉備「カズマ様・・・」

カズマ「俺は世の中が平和にとか、あんましピンとこねえが・・・
弱い奴らが強い奴のまえで泣く悔しさは分かる」

カズマは強く握った拳を見つめながら呟く

カズマ「だからお前らの気持ちも分かんなくはねえよ・・・」

関羽「では・・・」

カズマ「帰る手段が見つかるまでは協力してやる」

一刀「それに『飯食べさせてくれた一飯之恩もあるしね』

カズマ「まあな・・・」

そう言って笑顔で劉備達を見ると・・・

劉備「一飯之恩?」

関羽「一飯之恩・・・ですか」

張飛「一飯之恩・・・」

一刀「ん?どうしたの皆」

3人は気まずそうな顔をして

劉備「えっと、天に住んでた人達だからお金持ちかなあ、なんて思つていて」

关羽「ご相伴にあづかるつかと・・・」

カズマ「おい、まさか・・・」

張飛「つまりお金持つてないのだ」

一刀「・・・え?」

この時、一瞬頭が真っ白になつたのと店の女将が厨房から出て来たのは同時だったと思う・・・

劉備「はあ～～～～～～、疲れたよお～～～～～」

カズマ「なんで俺があんな事・・・」

俺達はあの後、無錢飲食を許してもうつかわりに店で皿洗いなどの手伝いをした。

正直疲れたが、話を聞いていたらしい店の女将が祝いの酒と、近辺を納めている公孫贊が義勇兵を集めているという情報をくれた

ちなみに公孫贊は劉備の学友らしい。そういうのは早く気付いて欲しいものだ

劉備「この辺りかなあ～」

関羽「女将の話だとこの辺りのです」

張飛「きっと丘の向こうにあるんじゃないかなー？」

一刀「じゃあ、行つてみよつ」

5人「おお～～～～～～～！」

眼下に広がるのは一面桃色の世界

劉備「これが桃園かあ～～、す～いねえ～～」

関羽「美しい・・・、まさに桃園に相応しい美しさです」

一刀「雅だなあ～～」

などと、3人でしばし風雅を楽しんでいると

張飛「さあ酒なのだ～！～」

カズマ「おい。早く飲むぞ！～！」

張飛が一刀の周りを走り回り、カズマが酒瓶を開けようとす

関羽「まつたく、もう少し」の景色を楽しめばよいものを・・・

劉備「あはは、じゃあ飲もつか

一刀「よし、準備しよつ」

手に持つた盃に酒を注ぎながら、

一刀「それにしてもあの有名なシーンに同席できるとなんて・・・」

劉備「どうかしたの？」主人様

劉備達はこれから俺に仕えるかたちになるらしい

カズマでもいいじゃないかと言つたが、柄じゃないと断られた
だから一応俺がみんなのリーダーになった

これはおそらく俺が天の御使いでカズマが天の拳であるうといつ子

想でもある

天の拳についてはわかつてないが俺は普通の一般人と自負しているためカズマが天の拳だらう

一刀「いや、なんでもないよ・・・ただこれからどうすればいいのかなあって」

関羽「前を向いて一步一歩、歩くしかないでしょうね」

張飛「立ち止まつても、物事は何も進展しやしないのだ」

一刀「・・・張飛の言つ通りかもな」

張飛「そつそつなのだ！・・・それよりお兄ちゃん、カズマお兄ちゃん」

一刀「ん？」

張飛「お兄ちゃん達は鈴々達のご主人様になつたんだから、ちゃんと真名で呼んで欲しいのだ」

カズマ「なんだそれ？」

関羽「我らの持つ、家族や親しい人にしか呼ぶことを許さない神聖な名です」

劉備「例え知つていてもその人に呼ぶことを許さないと口に出しちゃいけないんだよ」

張飛「だけどお兄ちゃん達には呼んで欲しいのだ」

一刀「（真名か……）」

それだけ期待してくれていいんだろうな

関羽「我が名は愛紗」

張飛「鈴々は鈴々なのだ！」

劉備「私は桃香！」

一刀「愛紗、鈴々、桃香」

3人の真名を呟いていると、

カズマ「で、お前は？」

一刀「へ？ 最初に名乗ったよね？」

カズマ「……忘れた」

劉備「あははは……」

絶対聞き流してたな……

カズマ「俺はカズマだ。それ以外無えよ」

一刀「俺は北郷一刀だ。一刀でいいよ」

カズマ「一刀か、オッケー刻んだ。」

そして彼女達を真っ直ぐ見つめ

一刀「今はまだ自分に何が出来るかわからないけど、みんなの力になればと思つよ」

劉備「じゃあ結盟だね！」

そんな俺達を見ていた愛紗が持つていた盃を空に向かって高々と掲げた

関羽「我ら5人！」

劉備「姓は違えども、姉妹の契りを結びしからは！」

張飛「心を同じくして助け合い、みんなで力無き人々を救うのだ！」

関羽「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも」

桃香「願わくば同年、同月、同日に死せんことを…」

一刀「…乾杯！」

この桃園の誓いから俺は『事』を成すため、戦国の世に踏み出した。

4話　『公孫賛』（前書き）

基本一刀視点です

桃園の誓いの後、公孫贊の本拠地に向かい街で情報収集を行なつた。桃香の友人でも相手は街の太守、ズカズ力行つても門前払いだと思つた俺たちは近くに居る賊のを討伐するという公孫贊に自分達でも義勇兵を集めてそれを提供することにした

と、言つても、兵隊を雇う金なんて俺達は全然持つてなかつた・・・
なので正式に雇うのではなく、半日だけ兵隊の『フリ』をしてもら
うこととした。

無い金は天の筆と称して俺が持つっていたボールペンを愛紗に売つて
もらつたらかなり金額になつたそうだ

そして数時間後には百人ほどの兵士（偽）が集まつていた

これなら公孫贊も目をつけてくれるだろうと、俺達は公孫贊の居る
城へ向かつた

一刀「ここまでは順調だな・・・」

百人ほどの兵士を連れて城に行つた俺達は門前で少し待たされたが、
下にも置かない扱いで玉座の間へと案内された

公孫贊「桃香！久しぶりだなー！」

劉備「白蓮ちゃん、わやーー！久しづりだねー！」

二人は再開を喜びながら話している

カズマ「で、まずどうするんだ？」

一刀「公孫賛には悪いけど俺達の評判を良くするために利用させてもらひよ。まずは愛紗と鈴々だけでも兵ではなく将として扱つてもらひよよつとする」

俺とカズマが公孫賛に聞こえないように話していると、

公孫賛「桃香が言つているのはこの4人のことか？」

劉備「そうだよ。んとね、関雲長、張翼徳、それに官？お墨付きの天の御使い、北郷一刀さんと天の拳を持つカズマさん！」

公孫賛「官？あの占い師か・・・」の辺じやかなりの噂だ。眉唾ものだと思つてたけど

劉備「そんなことないよ！2人共本物だよ！」

公孫賛「ふーーーん・・・」

頭からつま先までジロジロと見つめてくる公孫賛

カズマ「あんまジロジロ見んじゃねえよ・・・」

劉備「あーーー、白蓮ちゃん信じてないでしょ？」

公孫贊「いや、桃香は嘘つかないし信じてるけど・・・」

公孫贊は顎に手を添えて

公孫贊「なんかそれっぽくないなあと思つて」

・・・ですよね

いきなりこの人達が天からきましたと言つても普通は信じない

劉備「私には一人の背後に後光が見えるよ。」

一刀「・・・ま、後光は別として、一応桃香達と行動を共にしているよ。宜しく」

公孫贊「そうか。桃香が真名を許したのだから一角の人物なのだろう。・・・ならば私のことも白蓮で良い。友の友なら、私にとつても友だからな」

屈託のない笑顔を見せる公孫贊、・・・いい人だなあ。

一刀「北郷一刀だ。宜しく」

カズマ「カズマだ」

公孫贊「宜しく頼む」

挨拶を終えて話の本題に入る

どうやら白蓮には兵の偽装がバレていたようだ。さすがは一太守だなど感心して本当のことと告げる驚いていた

流石に全員が偽兵士だとは思わなかつたようだ・・・

公孫贊「一人も居ないのか・・・?」

一刀「桃香と行動を共にしているのは俺とカズマ、関羽に張飛だけだよ」

公孫贊「関羽と張飛は後ろの二人のことか?」

関羽「我が名は関羽。字は雲長。桃香様の第一の矛にして幽州の青龍刀。以後、お見知りおきを」

張飛「鈴々は張飛なのだ!すつごく強いのだ!」

劉備「二人共すつごく強いんだよ!」

胸を張つて二人のことを自慢する桃香

公孫贊「まあ、桃香の胸ぐらの保証があるなら、それはそれで安心なんだけど・・・」

うーん、と唸りながら愛紗達を見つめていた公孫贊の後ろから、

??「その二人の力量を見抜けないのであれば、太守として些か不安ですぞ。伯珪殿?」

痺れ毒を含んだような言葉と共に、一人の美少女が現れた

公孫贊「むう・・・ならば趙雲はこの一人の力量がわかるのか?」

趙雲「当然。武を志す者として、その姿を見ればどれほど人物が分かるいつもの」

公孫贊「へえ……まあ星が言うならそうなのかもな」

趙雲「ええ。……そうだらう。関羽殿」

関羽「そういう貴女も腕が立つようだが?」

張飛「鈴々もそう見たのだ!」

趙雲「さて……どうなのでしょうな?」

余裕を感じさせる笑みを浮かべる趙雲

趙雲「(それと、もう一人……)」

チラリ、と話を聞いていないのであるが、そっぽを向いているカズマに視線を向ける

趙雲「(武、とは言わないが……何か力を持っているような不思議な御仁だ……)」

何かこの時代はめんどうせえ事ばつかだな・・・

賊やう、太守やう、世の中平和にとか、俺の居た所はもつと自由だつた気がするぜ

いや、そうでもねえか・・・

ホーリーやう、ネイティブルター やう、街のゴロツキとかいたな

今は関係ねえか

それにも関わらず我ながら変な奴らに協力しちまったな

あの頃は自分の周りだけよければいいと思つていたが・・・

世の中全部が、でけえ事考へてんな。嫌いじやねえ

俺としては占い師を探してえんだが場所が分からねえ・・・

そいつに聞けば帰る方法も分かるかもしんねえが、ここに来ちまつた理由も気になる

天の拳か・・・そついえば、誰かに期待されるなんてあんまし無かつたな・・・

あいつ等三人は、俺と一刀に期待してる。

勝手に評価されんのは好きじゃねえが、不思議と悪い気はしねえな。
・

まあ、帰る方法が見つかるまでは協力してやるよ

さて、小難しい話も終わったよつだし、早く賊退治に行こう

やつをと終わらじて飯食つて寝てえんだよ、俺は・・・

5話『拳』（前書き）

ご指摘を頂いたので追加補足いたします。前に表記したかなみと出会っていない設定ですが、これは時間軸はアニメ開始時ままで君島には出合っていますがかなみとは出合っていない・・・つまりどちらかなみ存在しない設定に勝手ながらさせて頂きました。作者のご都合主義で申し訳ありません

こうして俺達は公孫賛陣営に加えてもらつことになった

城門に呼ばれた俺達の目の前には武装した兵士達が整列している
千人単位の人間が集まる様子は壯觀の一言だった

趙雲と愛紗達は自分達の志を語り合つて意氣投合したらしく、真名
を交換していた

そんな風に会話を楽しんでいると陣割が決まった

关羽「我らは左翼の部隊を率いることになりました。新参者に左翼
全部隊を任せるとは、なかなか豪毅ですね、白蓮殿も」

劉備「それだけ期待されているのかな?」

一刀「そうだろうね。・・・鈴々、頼むよ?」

張飛「任せうなのだ!」

ドン、と胸を叩いて自信満々な鈴々の頭を撫でていると軍の先頭に
いた公孫賛が演説を終え、大地を揺るがす兵士の声を満足気に聞い
ていた公孫賛はいよいよ出陣の号令を出した

一刀「賊相手に初陣かあー・・・」

关羽「どうかされましたか?」

一刀「いや、俺のいたところは平和で戦争なんて遠い別の国でしか起きてなかつたから正直怖くて・・・」

自分の振るえる手を見せながら、不安を吐露する

一刀「男の俺がこんなに怖がつてぢや、世話ないな・・・」

関羽「そんなことありません！戦いを怖がるのは、人として当然です」

劉備「そうだよ。戦いは人を傷つけること・・・本当はやつちやいけないんだよ」

張飛「でも、鈴々達が怖がつてたら弱い人達を守れないのだ」

関羽「だから勇気を振り絞り、暴虐と対峙するのです」

一刀「・・・強いな、三人とも」

三人は出会い前から山賊なんかと戦っていたんだから当然か・・・

あれ？

一刀「カズマは戦いが怖くないのか？」

ここで出陣の時から平然としているカズマに尋ねる

カズマ「んあ？別に。・・・こんな多人数は初めてだが、俺ももといた場所じや戦つてたからな」

一刀「でも、人を傷つけるかもしれないんだぞ?」

カズマ「分かってるよ、んなこと。・・・けどな、俺の目の前に分厚い壁があつて、それを突破しなければならないなら、俺は迷わずこの力を使う」

一刀「力?」

そう言つてカズマは右手の拳を握る

一刀「カズマ、それつて・・・」

カズマ「お前もいつまでもビビつてんじゃねえぞ。戦うつて決めたんだろ?」

カズマは強い視線を俺に向けた

カズマ「一度こいつと決めたら、自分が選んだんなら決して迷うな。迷えばそれが他者に伝染する。選んだら進め、進み続ける。」

一刀「カズマ・・・」

選んだら進めか・・・

そうだな、俺は桃香達と進むつて決めたんだ

パシッ、と頬を叩いて弱気になつっていた自分に気合を入れる

一刀「よしーみんな頼りにしてるよー」

俺が決意を新たにしていると、

兵士 全軍停止！これより我々は鶴翼の陣を敷く！」

本陣からの伝令が命令を告げて去って行つた

関羽 いよいよですね・・・」

一方、ああ、兵隊の指揮は、鈴々任せたよ。

張形 - 合点なのだと！」

關羽・桃香様は「主人様とガブ・麿と共に」

「二人とも氣を付けてね」

開司 御意では！」

とお舐儀しが愛戀が詔院は母をかける

兵士が抜刀すると同時に黙が突出して来た

弘飛
それよりお
鎌生は續くのた

号令と共に突撃していく愛紗達、兵数は相手の方が勝つていたが愛紗と鈴々に次々と打ち倒されていく賊

戦は完全にこちらが優勢だった

カズマ「なんで俺は待機なんだよ・・・」

劉備「まあまあ、いい」せんと鈴々せんに任せよ。」

「ああ、それに」「ちが優勢みたいだし無理に出る」とないよ」

カズマ - け

戦えなくてカスマは不満そうだ

しかし、ガス^{メタ}でそんなに強いのか？

元いた時代いや戦にてたらしいけと武器も持てないし……

張飛 みんな銃々に繋ぐのだ！」

こちらの勢いに飲まれて撤退していく賊

劉備 あ！敵が逃げていくよ

一刀一あめ、これで・・・」

これで終わる。そう思つていたら……

「云々」で、今令一・二・三

慌てた様子で兵士が走つて来た

兵士「左舷中央から敵！伏兵その数五百！…」

一刀「え？」

伏兵？…まずい、愛紗と鈴々は賊の追撃で離れている

ここにも兵士は残つてゐるけど将がない

劉備「ど、どうしよう…」主人様！」

一刀「くつ、せめて愛紗達に合流できれば…」

対抗できる兵数はいるが兵を率いたことのない俺と桃香は焦る

くそ…どうすれば…

カズマ「へつ、やつと出番か？」

一刀「なつ！？カズマ」

カズマは肩を回しながら迫る賊の方へ歩いて行く

一刀「待てカズマ！一人じゃ危ない！」

カズマ「こんなところで大人しくしてゐるなんて、御免だね」

振り返るカズマの顔に不安は無い、むしろ強い意思を感じる

一刀「でも一人でどうするんだ！？武器も持たないで・・・」

カズマ「武器ならある」

カズマは右拳を軽く掲げると、

カズマ「お前等はそこで待つてろ！見してやるよ・・・俺の両手の

拳をな」

賊「あいつ等全員ぶつ殺せ――！」

賊「あいつ等全員ぶつ殺せ――！」

部隊長「やつらも賊が伏兵を使つなんて思つまい。・・・ん?」

自分達の策に醉つてゐる賊達の目の前に一人の変な服を着た男が歩いて来た

部隊長「なんだあ? お前

カズマ「あんたが部隊の頭か?」

そいつは自分達を前に怯えることもなく不敵な笑みを浮かべながら立っていた

不振に思い、部隊を停止させた

部隊長「何かようか? 小僧」

剣を向けて威嚇すると後ろにいた奴らもニヤニヤ笑いながら近寄つて來た

カズマ「お前らをぶつ飛ばしに來た」

何言つてんだこいつ?

一瞬間に空いて言葉の意味を理解した時には笑いが出た

部隊長「だはははは! 一人で何が出来んだよ」

他の連中も笑う

カズマ「てめえ等なんか一人で十分だ」

カズマ「なはははははーー！」

気に食わなかつた。自分達を目の前にして平然としているそいつが

部隊長「てめえが笑つてんじやねえ！――！」

そいつに近づいて剣を振り下ろした

一刀「カズマ！！！」

劉備「カズマさん！！！」

カズマ「へつ」

カズマはそれを右に体を半身にすることで避け、剣を持っている賊の腕を右手で掴んだ

部隊長「なー!?離せーーー!」

そう言つて空いている左手で殴ろうとした時、顔面に痛みが走った

カズマは賊が振りかぶった瞬間手を離して左のストレートを放つた
もろにそれを受けた賊は仲間の方へ飛んで行き、鼻から大量の血を
流しながらカズマを睨んだ

部隊長「てえ、てえみえ・・・・」

辛うじて立つた賊は鼻血を乱暴に手で吹きながら

部隊長「ぶつ殺す！..！」

カズマ「おお、怖え怖え。・・・だけど先に喧嘩売つてきたのはそつちだぜ？」

賊「喧嘩？何言つてんだ。こいつは殺し合いだ！！！」

カズマ「俺にとつては喧嘩だ。お前等が売つた！俺等が買つた！・・・・それだけだ」

一刀「カズマ下がれ！殺されるぞ！」

後ろからカズマを追いかけてきた一刀が叫ぶ

カズマ「見てろつて言つたろ？それに天の拳だなんだ言われてなんにもしねえのはおかしいだろ」

カズマは体制を低くし、左腕をダラリと下げ、右腕を賊の方に向けた

カズマ「見してやるよ。俺の自慢の拳をな・・・」

右手の人差し指、中指、薬指、小指、最後に親指を閉じて軋むほど拳を握り締めた

するとカズマの体が光に覆われ、地面に数箇所穴が空いた

部隊長「なんだこりゃ あああ！？」

地面は粒子となつてカズマの右腕に集まつっていく

髪の毛は逆立ち

背中には三つの赤い羽のようなものが生えて

腕は太陽を思わせる黄金の装甲に包まれ

拳は炎を感じさせる手甲に覆われていた

一刀「カズマ・・・？」

劉備「わあ・・・」

これがカズマの言つていた力？

一刀はカズマに戦の前に感じた頬もしさの招待を知つた

賊「なんだ？あれ・・・」

部隊長「い、いきなり地面が・・・」

地面がえぐれたり、カズマの腕に突然武装が出来たことに驚く賊

カズマ「おい！一刀！」

一刀「え！？な、何？」

カズマ「俺達の評判を高めるにはド派手にやつた方がいいんだよな

？」

一刀は感じた、カズマなら一人でも賊達を倒せると、

一刀「ああ、派手にやつてくれ！」

カズマ「へつ、あいよ……！」

ドゥン……！

カズマは右手で地面を殴り、人が殴つたとは到底思えない音を出し、
その衝撃で賊達の頭上へと飛んだ

一刀「な……！」

劉備「ええ……！？」

一刀と桃香はその高さに驚き、賊は口を開けて呆然としていた

カズマ「悪いが、手加減はしねえ。最初から本気だ……！」

カズマの右腕の装甲が開き、力いっぱい拳を握る

背中の羽の一つが砕けて、そこから光が吹き出し、カズマは賊に向
かつて勢い良く降下していった

ここから世の中は大きく動く

その始まりの地に

カズマ「衝撃のお・・・」

流星が落ちた

カズマ「ファーストブリットオオオ！！」

5話『拳』（後書き）

やっとカズマの戦闘シーンが書けました。でも血をたらさんなんで良かったんでしょうか？感想快くお待ちしています

6 話『道』(道場や)

鈴々つて動かしやすございますねー

一瞬だつた・・・

カズマが放つた拳は勢い良く賊達に突き刺さり、爆発音と共に巨大な土煙を上げた

土煙が晴れるとそこには衝撃で倒れている者、腰を抜かしている者、または目の前の出来事について行けずに呆然と立ち尽くしている奴もいた

かく言つ俺と桃香もその一員で、口をポカーンと開けて地面から拳を離すカズマの後ろ姿を見ていた

仕方ないさ、誰がこの状況を見て口を開けずにいられるか
だって、そこには直径10mほどのクレーターが出来ていた・・・

一刀「・・・・・」

劉備「・・・・・」

確かにド派手にやつて下さーと言いましたが、これは予想外ですカズマさん・・・

残つた賊をクレーターの中から睨んだカズマは、

カズマ「さあ、挨拶は終わりだ。掛かつてこい！――」

そう言って右の拳を握りながらまた戦闘体制に入る

しかし賊は・・・

それと同時に・・・

情けない叫び声を上げながら逃げていった

それを見たカズマは今俺達と同じ、口を開けて呆然とした顔をして、その賊の逃げつぶりを見ていた

田の前から賊が居なくなると、

カズマの叫びが青い空に響いた

こつじて

カズマと、愛紗や鈴々、そして星の活躍もあって公孫贊軍は完全勝利を得た

白蓮や星と合流し、意氣揚々と引き上げる中、カズマはまづと不満そうな顔をしていた

やつと力が振るえると思ったら、敵は脱兎の如く逃げた

つまり不完全燃焼だ・・・

あの後、鈴々は勝つて上機嫌だったが愛紗は申し訳なさそうな顔だった

カズマが撃退してくれたとはいえ、自分の仕える主君に敵の接近を許したのだから無理もないか

でも、無事だつたし愛紗は悪くないよ、と言つたがまだ納得しないようだ

後で桃香にフォローしといて貰おう

大勝利で初陣を飾つた俺達は、城の一角に部屋を与えられ、白蓮の下に留まっていた

こうしている間にも賊討伐は続き、今では愛紗と鈴々の武名を知らない者は居なくなつた

一方カズマはとすると、あまり前線には出なくなつた

最初は自ら前線に出ていたが、『力』を使う度に賊が逃げるので實際作戦効率は悪くなつた

なのでカズマは俺と桃香の護衛が主な役割になつていた

そんな俺は最近大陸の様子がどこかおかしいことに気がついた

賊の横暴、大飢饉、疫病、人の心には不安の文字しか浮かばなかつた

そしてついに民衆の不満が爆発し、民間宗教の指導者に率いられ官庁を襲う事件が起きた

暴動は官軍によって鎮圧されるかと思ったが、反撃を受けた官軍が

全滅

それをきっかけに暴徒達は周辺の街に侵攻し始めた

それは破竹の勢いで、今では大陸の三分の一が暴徒に乗つ取られ、世は動乱の時を迎えた

これに漢王朝は焦り、官軍は頼りにならないと判断し

地方軍閥に討伐を命じたのは、昨日の話だ

漢王朝の命が来た時、ここから本当の戦いが始まる

そう思った・・・

一刀「ごめん、遅くなつた」

侍女に連れられてやつて来た玉座の間には、白蓮の他に星や、桃香と愛紗がいた

一刀「あれ、鈴々とカズマは？」

関羽「鈴々は今カズマ殿を呼びに行つています」

しばりくすると元気な声で走つてくる鈴々と、

張飛「お～～～い、お姉ちゃん～～～ん～～～」

カズマ「わあわあわあ～～～」

鈴々に腕を掴まれ、引き摺られながら叫ぶカズマがやつて來た

張飛「ほい！――！」

カズマ「ぐへ――――――！」

鈴々は俺達の目の前にカズマを放り投げると、カズマは潰れたカエルのような声を出して床を滑った

張飛「カズマお兄ちゃん連れてきたのだ！」

劉備「え、えっと、『苦労をまへ

桃香は予想してなかつた連れて来る方法に苦笑いで褒めていた

カズマ「・・・・・・・・・・・・

一刀「力、カズマ・・・・・？」

カズマ「だあああああああああ――――――！」

カズマは勢い良く飛び起きた、無事のようだな

カズマ「何しやがんだ！チビ助！」

張飛「にや？カズマお兄ちゃん呼びに行つた時眠たそうだったから
鈴々が連れてきてあげたのだ――！」

カズマ「ほい！」と無邪気な笑顔で答える鈴々

カズマ「あんな！俺だって呼ばれば自分で行くわ――！」

関羽「まあ、まあ」

カズマを宥める愛紗、そこへ白蓮がオズオズと話しかけて来た
公孫贊「え、えっと、休んでるところすまんな。呼び出したりして
一刀「構わないよ。それより、何かあったの？」

公孫贊「・・・北郷も朝廷より、使者が来たのは知っているな？」

一刀「ああ、黄巾党を討伐しきつて言ひやつだら？」

そう答えると、白蓮は真剣な顔に戻り、話を始めた

公孫贊「そうだ。私は既に参戦することに決めたんだが・・・」

劉備「白蓮ちゃんが、これは私達にとつて好機じゃないかって」

一刀「好機？何の？」

関羽「我等が独立する好機ということです」

公孫贊「黄巾党鎮圧で手柄を立てれば、朝廷より恩賞を得るだらう。桃香達がその気になれば、それなりの地位にもつけると思ひ。そうすれば、もっと多くの人達を守れるだらう？」

白蓮は少し困ったような顔で、

公孫贊「残念ながら、今の私にそんな力は無い。この動乱を収めた

いと思ひてはいるが・・・すぐにはむりだ。そんな私に桃香達を付き合わせるのも悪い。時は金より貴重だからな

一刀「ふむ・・・」

白蓮の言葉には一部の真理があるのだろう。だがそれだけとは思えなかつた

白蓮はおそらく俺達の扱いに困つてゐるのだろう

密将としてはすでに星がいる。それに最近名が上がつてきた桃香達がいたら、それは太守として面白くないだろう

一つのグループにリーダーより名聲のある人物はいらない。だから、手柄を立てさせてさつさと独立させるのが無難だまあ、人の良い白蓮のことだから、そこまで意地悪く考へていないだろうけど・・・

なら、今までの休む場所とチャンスをくれた白蓮には感謝の念が絶えない

一刀「・・・そうだな。俺達もそろそろ自分達で頑張つてみるか

張飛「でも、鈴々達だけで大丈夫かな?」

一刀「それでも、いつまでも白蓮に頼りっぱなしじゃまずいだろ?」

関羽「そうですね。しかし、私達には手勢といつものがない・・・それが不安ですね」

俺達がこれからについて考えが浮かばず、悩んでいると・・・

趙雲「手勢なら街で集めれば良い。な、伯珪殿？」

案を出したのは星だった

公孫贊「お、おいおい！私、だつて討伐隊を編成するために兵を集め
るんだからそんなの許せるはず……」

超雲「伯珪殿、今こそ器量の見せ所ですぞ」

公孫贊「うう……」

顔が引きつっている白蓮に星が悪戯っぽい笑みを浮かべて、

趙雲「それに伯珪殿の軍は皆勇猛ではありますんか。義勇兵の五百
や千、友の門出にて贈つてやればよいのです」

公孫贊「む、無茶言ひなよ……」

趙雲「私も勇を奮つて働きましょ。う。……どうです、伯珪殿？」

公孫贊「むう。あ、あまり多く集めないでくれると助かる……」

洪々といった感じで了承した白蓮に思わず苦笑が漏れそうになる

カズマ「お前いい奴だな……」

一刀「じゃあ遠慮なく集めさせてもうう。桃香、愛紗。手配を頼
んでいいかな？」

劉備「まつかせーなセーー！」

関羽「御意。直ちに準備します」

二人は徵兵の準備に取り掛かった

公孫贊「はあ・・・・、じつなつたら私も出来る限りの協力はするよ・・・」

一刀「はは、ありがと。」の恩はいつか必ず返すよ

公孫贊「ああ、よろしく。・・・星、武具と兵糧の供出するよつ、兵站部に手配してくれ」

趙雲「了解した。さ、北郷殿参らうか」

張飛「鈴々も行くー！カズマお兄ちゃんも行ーー！」

カズマ「分かつたから引っ張んじゃねえーー！」

鈴々と、また引き摺られそうなカズマと一緒に兵站部へ向かった

その途中・・・

一刀「そりこえ、さつきはありがとつ」

俺は前を歩く星に話しあげた

趙雲「別段。礼を言われるよつな」とほしておつませぬ

一刀「けど、白蓮を上手く乗せて・・・俺達に便宜を図ってくれたじゃないか」

趙雲「ふふ、なんのことやら・・・。それより北郷殿。討伐に際して、何か策のようなものはお有りか?」

悪戯っぽい笑みをした後、一転して真剣な表情で訪ねてきた

一刀「実は特に無かつたりするんだよな・・・鈴々は何かある?」

張飛「鈴々は敵をやつつけるだけなのだ! ! !」

予想通りの答えだな・・・

一刀「カズマは?」

カズマ「カズマは敵をやつつけるだけなのだ

張飛「ああー! ! ! 鈴々の真似するなー! ! !」

二人はそう言つてじやれっていた

一刀「まあ・・・集まる義勇兵の数にもよるかな? 敵の情報も不足しているし、それらを集めてから本格的に行動開始だな」

超雲「なるほど。しかしあまり悠長なことをしていては、功名の場を失うのでは?」

一刀「最初の一歩は慎重な方がいい。俺達が軍勢を率いても弱小勢力に過ぎない・・・功を焦つて全滅したら元も子もないだろ?」

趙雲「ふむ。・・・なかなか良くお考えだ」

俺を信頼してくれてる人達のためにもここで失敗するわけにはいかない

一刀「とこりでさ・・・趙雲」

趙雲「星でよろしい。私はあなたを気に入っていますゆえ。それに・・・」

星は鈴々をからかっているカズマに目を向ける。その目は面白い物を見つけた様な目だつた

俺達の初陣でのカズマの武勇伝は瞬く間に広がつた。

天の拳を持つカズマが賊を一撃で倒したと・・・

それから星はカズマにも興味を持つたようだ。

カズマの拳、カズマはあれを『アルター』って言つていた

カズマのいた所ではその不思議な力をもつた『アルター使い』が複数いたようだ

能力を発動させる時、周りの物を分解して『アルター』を出すようだが、本人にもそれ以上のこととは詳しく知らないらしい

一刀「分かつた・・・なら、星。星は白蓮の家臣になるつもりはないのか？密将つてことは、正式な家臣じやないんだろ？」

趙雲「ええ。密将とはあくまで密分。好意によつて力を貸しているにすぎませぬ」

一刀「じゃあ、いつか星もここを出るのか?」

趙雲「さて、・・・自分でも分らないのですよ。ここに留まるか、はたまた徳高き主を探すのか」

本人もまだこの世をどう渡ろうか決めかねていつうだ

一刀「そつか。・・・なあ、星。もし、もしだよ?白蓮の所を出ることがあれば、俺達の所へ来てくれないか?」

趙雲「ふむ。・・・それもまた道かもしれないが。すまんが、自分の道は自分で選びたいのだよ」

一刀「そつか。・・・ごめんな。変なこと聞いて」

ふられたか・・・星は絶対桃香の力になつてくれそうなんだけど

趙雲「いや。本音を言えれば、誘つて頂いて嬉しいですが。伯珪殿には恩がありますゆえ。まあ、それを返した後は北郷殿の道と私の道が交錯するやもしれませんな」

一刀「・・・俺はそう信じているよ

趙雲「ふふ、私もそう信じておこう。ところで・・・」

そう言つて星は俺達が歩いていた通路の外、中庭を指さした

あるところには、鈴々をからかい過ぎたあげく

戦闘になりそうなカズマと鈴々がいた

趙雲「あれは止めなくてよろしいので？」

俺は中庭へ走り出した

7話『伏龍、鳳雛』

俺達が兵站の受領手続きを行なつてゐる間、桃香達は街に出て義勇兵を募る

「うして、手分けして作業をしてこらへん一週間が経過し……

準備が整つた俺達は集まつた義勇兵を率いて出陣の時を迎えていた

見送つてくれた白蓮の顔は引きつっていた

まあ、自分の街だけじゃなく他の邑からも集まつてくれて、結局六千人ほど取られちゃ無理もないか……

関羽「しかし、これからどうするか……」

張飛「こいつらと一を探し出して片つ端からやつつけるのだ

一刀「でもそれだとすぐ元兵糧がなくなるよ~」

カズマ「それは困る……」

劉備「うーん、どうすればいいのかなあ……

なんて悩んでいる

？？「しゅ、しゅみませんーあ、歯んじやつた……」

声のした方に振り向くとそこには、

？？「い、いとこがねーーー！」

？？「ちわ、つですう・・・・・」

可愛らしい帽子と魔女の様な帽子をかぶつた一人の少女がいた

カズマ「誰だ？」

？？「わ、私は、しょ、諸葛孔明れしゅー！」

？？「私は、んど、えつと、ほ、ほーとれしゅー！」

劉備「えつと・・・諸葛孔明ちゃんに、ほ、ほ・・・」

鳳統「鳳統れしゅーあつ・・・・・」

関羽「びひじことなどこーん？」

諸葛亮「え、えつと私達水鏡塾つていう私塾で学んでいたんですけど、大陸の危機的状況を見るに見かねて」

鳳統「私達の知識を活かして困っている人を助けようと思ったんですけど、自分達だけじゃ何も出来なくて、それで誰かに協力してもらおうと思って」

諸葛亮「そ、それで天の御使いが義勇兵を募集していると聞いてー！」

鳳統「それで話を聞くと私達と同じ考え方でいらっしゃると分かって、それで協力してもらおうと・・・・・」

諸葛亮「だから、あの、私達を戦列の端にお加え下さい！」

鳳統「お願ひします！」

そう言って小さな体を更に小さくするようにペコリと頭を下げた

関羽「戦列に加えるには少々若すぎる気もしますが」

一刀「愛紗の言つ」とももつともだけど、剣を持つだけが戦いじゃないだろ？」

劉備「そうそう！強くなれば戦えないなんてことないよ」

カズマ「お前も全然戦えないしな」

そう言われて桃香は軽く落ち込んだ

名前を聞いて仰け反りそうになつたが、二人は三國志を代表する名軍師だ

そんな二人が俺達に協力してくれるならこらから先にも希望が持てる

一刀「それに私塾で学んでたのなら、今後大きな力になつてくれるさ」

関羽「そうですか・・・なら、私はご主人様の判断にお任せします」

しかし、二人が仲間になるのが早くないか？

やつぱり単純に三國志の世界じゃないのか・・・

一刀「そうこう訳で。一人とも、これからようじへ」

諸葛亮「は、はい！私は姓は諸葛、名は亮、字は公明で、真名は朱里です！」

鳳統「んと、姓は鳳、名は統、字は士元で、真名は難里でしゅ！」

一刀「俺は北郷一刀。一応天の御使いつてことになつてゐる」

俺達は自己紹介をして桃香達も真名の交換をした

一刀「で、早速ですが俺達のこれからについて一人に意見を聞いたい」

諸葛亮「え、えっと、新参者ながら意見をさせていただきます。私達の勢力は他の諸侯に比べると極小でしかないので、これからは黄巾党の中でも小さな部隊を相手にして名を高めて行くのが最良かと」
愛紗は相手を選ぶことに迷つてはいたが、俺達は所詮自分の街も持つてない義勇兵の集まりだ

そんな俺達が名を高めて行くにはそれしかないのだろう・・・

そこで俺達は問題だつた兵糧は名を上げつつ、付近の街や邑の豪族に寄付を募つたり、敵の補給物資を鹵獲していくという方針になつた

こうして俺達は新しい仲間を迎えて白蓮の元を出発した

果てしない荒野を進みながら黄巾党の動向を探るために細作を放つ仕事をしているよつに聞こえるが実際は朱里と離里がやつてくれているのでやることがない

一刀「暇だ～。」これだけなにも起きないと拍子抜けだな

カズマ「何だ、戦いがしてえのか？」

一刀「そりゃう訳じやないけど、こつなんにもないと・・・」

すると、前方から兵士が走り寄ってきて跪く

兵士「伝令！こじより前方五里のところに黄巾党とおぼしき集団が陣を構えています！その数、約一万！」

一刀「い、一万！？・・・多いな、こつちは約六千」

兵数を考えれば苦戦は必至だな

カズマ「望みが叶つたな、戦争ジャンキー」

一刀「俺はこんなの望んでないよっ・・・」

報告を聞きながら、じつは頭の中でショコナードしていると、不意に袖を引かれた

そこには朱里とその背中に隠れた雛里がいて、

鳳統「だ、大丈夫です。きっと勝てます」

オドオドしながらも俺の目を見つめて大きく頷く

鳳統「私達には勇名を馳せる愛紗さんや鈴々ちゃんがいますし、兵隊さんの士気も高いですから」

一刀「でも、相手はこいつの『倍近く』いるよっ」

鳳統「だけど、えっと・・・わ、私達がいますから」

関羽「ん? どうこいつ意味だ?」

鳳統「あう・・・」

愛紗の言葉にビクリと体を震わせた雛里がコロコロと俺の後ろに隠れた

張飛「愛紗、雛里を怖がらせちゃダメなのだ

関羽「ええー? 私は別に怖がらせてなどーー!」

怖がる雛里の頭を撫でて慰めていると、場の空気を戾そつと朱里が進

み出る

諸葛亮「え、えっと、ともかくこんなときじゃ私と離里ちゃんが学んだきたことが役に立つと思うんです…」

二人は私塾で多くの兵法書や民法書、経済書など学到んでいたようだ
一刀「じゃあ実力を確かめる意味でも、数の差を覆す策について教えてくれるかい？」

その言葉に二人は二つと笑い

鳳統「はい！敵は五里先に陣を構えているとのことです、ここより五里先とは、兵法で言つク地となっています」

張飛「くちー、ってなんなのだ？」

鳳統「各方面に伸びた道が収束する場所のことです」

多分補給目的でそこに軍を配置したんだねけど、そんなところに一万しか兵を置かないなんて…

朱里「これにより、相手が雑兵だと言うことが分かります。そしてそこが狙い目かと」

鳳統「そこは重要な拠点のはずです。ここを破れば私達の名は否応なしに高まるはずです。さらに、敵は数の少ない私達を見て油断していることでしょう」

関羽「なるほど…。油断している敵を策を持つて破るといつこ

とだな？」

鳳統「は、はひ……」

また俺の後ろに隠れる

一刀「よじよし。見た田と違つて優しくよ綾紗は」

関羽「ほう……遠回しに見た田は怖いとおっしゃるのですね？」

カズマ「……」

関羽「カズマ殿、何か言いたそうですが……」

カズマ「な、なんでもねえよ……」

珍しくカズマが焦つてゐ、おそれべし関雲長……

張飛「そんなことどうでもいいから早く戦うのだ！」

一刀「ごめんごめん。それで話の続きをは？」

諸葛亮「数で負けているので、までは敵を引つ張り出し、数で負けない状況を作ります」

鳳統「そこでここから北東に一里ほど行つたところへ、川が干上がつて出来た谷があるのでそこへ誘き出します」

狭いところで数の利点を無くすわけか……ん？

一刀「なんでそこに谷があるってわかるんだ? 地図にはそんなの書いてないぞ」

諸葛亮「(+)主人様の持つている市販の地図には、道などしか書いてなくて山とか川なんかの細かいものは載つていません。幸い私は水鏡先生のツテで正確な地図が見れたので、おおよその地理は把握しています」

一刀「・・・大陸中の地形暗記してるの?」

鳳統「は、はい」

末恐ろしいな・・・

一刀「じゅあ、どうやつて誘き出す?」

諸葛亮「敵陣の前に全軍で出て、後は逃げます」

関羽「釣りか・・・」

鳳統「はい。そして谷まで追尾させます」

これで策は決まった俺はみんなに向かつて支指示を出す

一刀「じゃあ愛紗は前線で敵を釣つたら反転して谷を田指して。鈴々は後衛、その補佐に朱里がついてくれ」

諸葛亮「はい!」

一刀「俺と桃香は本陣、その補佐には雛里だついて。後、カズマだ

けど・・・

カズマ「わかつてゐよーまた待機だろ?」

一刀「ああ、護衛よろしく頼むよ」

劉備「じゃあ、方針も決まつたことだし敵さんめがけて微速前進」
「」

氣の抜ける桃香の掛け声と共に俺達は敵陣に向かって進軍し始めた

斥候「前方、敵陣地に動きあり!」

前方に放つておいた斥候が次々と報告してくる

一刀「わかつた。愛紗! 鈴々!」

関羽「御意!」

愛紗と鈴々は兵達に指示を飛ばした

斥候「敵陣開門！来ます！」

一刀「行くぞ、みんな！」

勇ましい声と共に突撃し、両軍が激突した

激戦を繰り広げるが、やがて数で押され始めた愛紗の部隊

すると、敵の後方から増援が出て来た

鳳統「ご主人様！敵陣に動きが有りました！恐らく状況を観察して
いた部隊出て来るかと」

劉備隊の後退を援護しつつ、
一刀「ああ！伝令！張飛隊に關羽隊、
打ち合わせ通り動いてと伝えて！」

兵士「御意！」

ね
一刀「籬里、愛紗達に合流した後すぐに後退するよ。準備よろしく

鳳統「はい！」

じぱりあると桃香と愛紗の部隊に合流した

一刀「二人ともお帰り！無事で良かつたよ」

俺は「一人が無事なことに安堵する

関羽「ご心配ありがとうござります」

劉備「でもご主人様、これからが本番だよ」

一刀「そうだな・・よし・すぐに反転！愛紗は鈴々の後方で後退の補佐、桃香は本陣の指揮を！」

こつして俺達は敵を引き付けながら谷を目指した

一刀「愛紗達の様子は！？」

劉備「大丈夫、追い払わず、諦めさせずに付いてきてるよ！」

作戦は順調。俺達は目の前に迫った目的地を確認して先行している部隊に一手に別れて待機し、殿が通り過ぎたら反撃に移るよう伝令を出した

一刀「よし！そろそろ俺達も反撃の準備をしよう」

そう桃香と離里に伝えると一人は各部隊に指示を出しに行く

鳳統「では、反転してくだれこーーー！」

目的の場所に付き、部隊を反転させて敵を待ち構える指示を聞いた兵達はやつと反撃できる」と元気揚感に身を震わせて、決戦の時を待つた

しかし「こじある疑問が浮かんだ

一刀「（カズマが静か過ぎる・・・）」

そつ、戦いが始まつてからカズマは一言も喋つていなかつた
緊張？いやいやそれはない・・・しかし俺達が峠間へ向かう途中も
ただ黙つて付いてきていた

不気味過ぎる・・・

そんなことを考えながら愛紗達の部隊を待つていると

劉備「ご主人様！愛紗ちゃん達が来たよ！ーーー！」

関羽「ご主人様！」

張飛「お兄ちやーーーん！」

諸葛亮「お待たせしましたー！」

一刀「よし、みんな反撃だー！」

張飛「待つてました！お兄ちゃん全力でやつていいよね！？」

武器を振り回しながら鈴々が訪ねてきた

一刀「ああ、行ってー！」

その告げると鈴々は部隊を連れて全速力で待ち伏せで混乱している敵に突っ込んで行った

それを愛紗がやれやれといった感じで追いかける

策にはまつた敵は一人に成すすべもなく、次々に倒されていった

そして・・・

諸葛亮「今です！敵は浮き足だつています！」主人様総攻撃を！

一刀「よし！みんな疲れてると思うけどあと一押しだ！」

関羽「勇敢なる義勇兵の諸君！その力今こそ見せる時！」

張飛「突撃、粉碎、勝利なのだ〜〜〜〜〜！」

兵士「うおおおおおおおおおおおお！」

士気は最高だ！後は敵を倒すのみ！！

一刀「全軍突撃！！」

カズマ「その言葉、待つてたぜ！－！」

振り向くと今まで静かだったカズマが走り出した

我慢してたんだな・・・

鳳統「あ、あのご主人様。大丈夫なんですか？カズマさん、武器も持たないで・・・」

一刀「ん？ああ、大丈夫だよ」

敵に向かって走つて行くカズマを心配する雑里

諸葛亮「で、でもう・・・」

一刀「まあ、見てればわかるよ」

そう言ってまだ不安そうな一人にカズマのいる方を指さすと、カズマが走りながら腕をアルター化させていた

それに驚く一人は目を大きく開いてそれを見ていた

カズマ「最近溜まつてたもん全部出すぞ！！衝撃のーー！」

カズマは拳を地面に叩き付けて上へ飛んだ

カズマ「ファー————ストブリットオオオオオオオオ————！」

よほど溜まつていたのが伝わるほど、この前より凄い雄叫びを上げてカズマは敵を吹き飛ばした

諸葛亮「・・・・・」

鳳統「・・・・・」

うん、初めて見たらそうなるよね・・・

カズマの一撃により敵はさらに混乱し、愛紗や鈴々達に倒されいつた

賊「くそ！なんなんだてめえ！－！」

等々、残り僅かになつた賊は皆、カズマに怯えていた

カズマ「弱い者イジメは趣味じゃねえが、お前らもやつてたんだろ？なら、文句は聞かねえ」

カズマは拳を強く握り締めた

カズマ「自分達のやつたこと後悔しな－！」

背中の一枚目の羽が砕けて賊に接近していく

カズマ「撃滅のセカンドブリットオオオオオ－！」

カズマが残る賊を吹き飛ばしたのを見て俺達は勝鬨を上げた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5471w/>

恋姫×スクライド

2011年11月21日16時16分発行